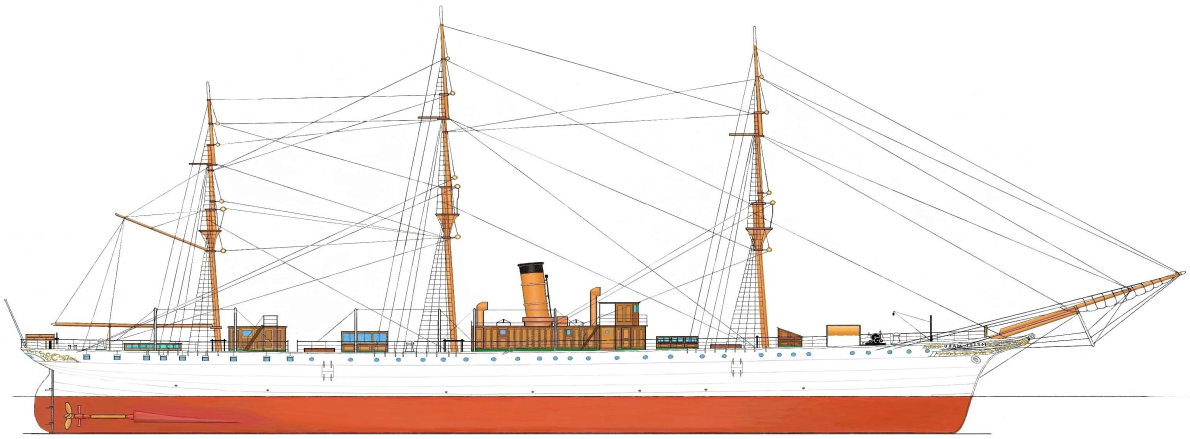
Ocean

海洋塾機関誌第21号



日本海洋塾のURL

Ocean記載のURL

令和4年4月8日

特定非営利活動法人 日本海洋塾
日本海洋塾は、世界を結ぶ海と船を、広く皆様に伝える活動により、海洋立国意識の拡充を目指しています。

§令和３年度の事業概要と令和４年度の計画について§

日本海洋塾理事長　都築雅彦

２０２０（令２）年１月から世界的蔓延が始まった新型コロナウィルス感染症は変異ウィルスの発生などで収束する気配がなく、令和３年度は海洋大学の入構制限が連続して続き、現在も収束の様子は見られず感染者は高止まりしており、第７波の始まりがうわさされています。　日本海洋塾（以下当塾）の活動領域である海洋大学明治丸海事ミュージアムなどの一般公開中止も３年目の春となり、依然として構内への入構制限が続いています。　このような先行き視界不良の環境ですが、令和３年度の事活動概要と４年度の事業計画概要をお知らせいたします。

決算については現在集計中であり、次号でお知らせいたします。

１，令和３年度の活動概況

コロナウィルスの蔓延状況に一喜一憂した一年で、大学の入構制限も期間延長の連続で、結果として年間制限となってしまいました。　このため学校行事も規模の縮小、実施の中止などとなり、関係団体の活動も制限されたことから前年（令和 2 年度）と同様の活動状況となりました。

（１）明治丸維持保全：　入構制限が続く中、明治丸の保守を継続しましたが、10 月からの明治丸定期修繕工事期間中は、ミュージアム事務室と協議の上で、資料館の保守に振り替えて活動を継続しました。

資料館の保守整備は屋内であることから、定期的な整備作業がされていなかったことから、不適切の展示状態の箇所がかなり見つかり、今後当塾の仕事に加え継続することとしました

（２）機関紙 Ocean の発行：　例年同様に年間３回の発行しました。原稿の投稿が少なく苦労していますが、一部の会員からは期待を込めた評価をいただいていますので、頑張って継続するようにします。

（３）関係団体との交流：　集会自粛等から前年と同様に行動制限されました。今までのように色々な話が出来るように戻したいものです。

（４）令和３年度事業収支：　コロナウィルス蔓延による活動制限により、令和２年度と同様の収支内容を予測しており､多少の黒字決算となる見込みです。

２，令和４年度活動計画

今年に入ってからの第６波コロナウィルス蔓延がこのとろ収束傾向がみられたものの、すでに新種の変異株が拡大しており予断出来ない状況にあります。　大学の入構制限も当面の対応として５月まで延長されており、入学式、学園祭、海の日記念行事などの行事がどのようになるのか心配されます。　とはいえ暫定的に夏休みからの一般開放を念頭に、以下の活動を計画しています。

（１）通常総会の実施：　　毎年５月末に実施の通常総会は、新型コロナウィルス感染防止のため、集会自粛が求められていることから、令和２年、３年と書面表決方式で実施してきましたが、出来ることなら今年は集会方式で会員諸氏の御意見をいただきたいところです。

（２）明治丸維持保全：　前年度の定期修繕で船内の展示環境が一部改善されたことから、当塾も更なる展示状況の改善に尽力することとします。
合わせて、課題の多い百周年記念資料館の資料、展示状況の改善にも協力することしますが、手間のかかる部分が多く、公開開始を想定しながら対応するつもりでいます。

（３）機関紙 Ocean の発行：　会員からの投稿を得て、年３回発行していますが、会員の意見表明の場でもあることから、投稿者を増やす方策を考えます。

（４）関係団体との交流：　新型コロナの蔓延状況によるものの、江東区観光協会等との交流により活動領域を広め、この交流により当塾会員の拡大につなげていくことを検討します。

（５）物品販売事業（利活用促進事業）：　海洋会ボランティアクラブと提携の「明治丸観覧記念グッズ（大皿、小皿、マグカップ、他　）」の販売方式を見直すこととしており、これを機に販売の拡大を検討することとします。

（６）令和４年度事業収支予測：　コロナ蔓延により積極的活動が制限されることから令和３年度と同様の収支内容が予測され、多少の黒字決算となる見込みです。

会員諸氏のご意見などをお待ちしております。

以　上

§映画『海のますらを』の誕生と挿入歌§

正会員　佐藤勝二郎

「Ocean」20号に、庄司和民先生（清N121）が明治丸ボランティアガイドの特別部会の設立と、映画「海のますらを」の保存と公開に、御尽力されたことを長尾卓治氏（東船大N5）が紹介された。

現在、この映画「海のますらを」は、日本海洋塾のホームページやウエブ検索をすることにより、パソコンで視聴可能である。

筆者は、大成丸の資料を提供した寮歌の研究者から挿入歌の題名を尋ねられた。東京海洋大学の百周年記念資料館にある、この映画のシナリオを、コロナ禍第五波が小康状態になった、昨年の12月1日に閲覧調査して、この映画に関して若干の知見を得たので、先号と重複する部分もあるが、ここに紹介する。

１．映画誕生の経緯

庄司和民先生は平成18年11月に、この映画に関する【『海のますらを』について】（以下「庄司メモ」という）と題する貴重な紹介文を作られており、そこには映画の製作目的、登場人物、完成後の特別試写会で観覧したこと、また「シナリオ」が残されていることも記されている。

映画作成の意図は、「シナリオ」には＜躍進日本、海国日本の将来を背負う海の若人東京高等商船学校生徒の意気と訓練状況を描き　海国日本の進展性を世に示唆せんとするものである＞と記されている。

東京高等商船学校のOB会である「海洋会」の、会誌「海洋」489号の「越中島たより」には＜海員の鳳雛を育て上げる商船学校の生活を紹介して海事思想を鼓吹するため＞と記されている。

映画冒頭から「洋楽」のBGMが流れ、大成丸の映像と鐘の音に続き、ナレーションは「海を制するものは世界を制するとは古へより云われた言葉であります　躍進海国日本はいまや北に南に躍進につぐ躍進をとげんとしてゐるのであります」、「この海国日本の将来を背負って立つ者こそは　熱と力に溢れ若き血潮に燃ゆる海の若人たちであります」と云っている。

当時の会誌「海洋」の＜越中島たより＞から、学校はどのように、この映画製作・撮影に関わったのか、その一部を知ることが出来る。

「庄司メモ」では、在学中の昭和17年6月頃に、総員特別外出でニュース映画館に招

待されて観覧したと記されておりますが、太平洋戦争開戦直前の昭和 16 年 10 月の「海洋」501 号には、９月 17 日に総員外出で映画館で観覧したと記されていますので、学校は何回か観覧させたのではないかと思われる。

昭和 15 年 10 月「海洋」489 号の越中島たより

文化映畫（海の若人）の撮影

南進論とか海洋發点とか航權擴張とかゞ國民層に高調されてきた今日、その第一線に活躍すべき海員の鳳雛を育て上げる商船學校の生活を紹介して海事思想を鼓吹するため、松竹文化映畫製作所がこゝに新鋭田中監督を派して、本校々内生活及び大成丸生活を九月下旬から撮影することゝとなった。関谷、矢崎兩教授及び伊藤、渡邊兩生徒主事達が之の指導にあたる。恐らく本年の十一月頃から全国の松竹系映画館に上映さるゝことゝならう。

昭和 15 年 11 月「海洋」490 号の越中島たより

文化映畫（海の若人）の撮影開始

前號に紹介した文化映畫「海の若人」（本校生徒を撮影）は九月下旬から撮影を開始した。

完了は予定より遅れ上映は來年になる見込みとのこと。

昭和 16 年 1 月の「海洋」492 号の越中島たより

創立六十五周年記念式
並に記念祭を開く

十二月二十五日は本校創立記念日に相當する。今年は六十五年目の輝かしき記念日を迎えることゝなった。

・・・・（中略）・・・・・

尚こゝに附記したいのは、本校生徒生活を撮影した松竹文化映畫「海の若人」は愈々十二月十六日を以って撮影を完了した。本號が各位の手にとゞく頃は市中に公開されてゐることゝ思ふ。

「ますらを」とは
1. りっぱな男。勇気のある男。
2. 武人。兵士。
3. 狩人。猟師。

漢字は「丈夫、大丈夫、益荒男、益良雄、益荒雄、壮夫、・・・」などと表現されている。

「鼓吹（こすい）」とは
盛んに宣伝して、相手に教えこむこと。

「庄司メモ」によると、大成丸の撮影は『昭和 15 年 9 月 25 日第 61 次航海ハワイよりの品川帰着後品川沖で行われた』と記されている。

映画の題名が「海の若人」から「海のますらを」に変更にされた理由が分からない。

昭和 16 年 10 月の「海洋」501 号の越中島便り

「海のますらを」映畫觀賞

松竹映畫株式会社に於いては我が越中島の日常生活を主題として文化映畫を作製中であったが先頃漸やく完成し、既に一二ケ所で試写会が行はれたが其の評判甚だよく近日中に先ず大都市一斉に封切りせられるとの事であるが、それに先立つて松竹社に於ては九月十七日（黄海々戦記念日の翌日）越中島の全生徒を銀座映畫劇場に招待して特別映寫を行った。

この映畫が大都市で一般に公開せられるのは十月中旬頃との事で、地方にも年末頃迄には公開されるだらうとの事であるが、是非同窓諸兄の御觀賞を希望する次第である。

鳳雛（ほうすう）：鳳凰のひな。優れた少年のたとえ。
鳳凰（ほうおう）：想像上の霊鳥。

２.「シナリオ」と BGM・挿入歌について

百周年記念資料館で閲覧した映画シナリオは、A4 サイズにコピーされたもので検閲印がある表紙を含めて 25 ページあり、表紙裏に先述した製作目的が記述してある。「松竹文化映画」、「海のますらを」、「後援　東京高等商船学校」の標題の次にスタッフ名があり、全て手書きである。後のページは将に台本らしく中央に音声とナレーションと挿入歌の歌詞が記され、下段に BGM が「洋楽」と記されている。

通常、映画には主題歌や BGM が流れるのであるが、文化映画であるから主題歌は無く、単に「洋楽」「合唱」と記してあり、曲名・題名は記されていない。

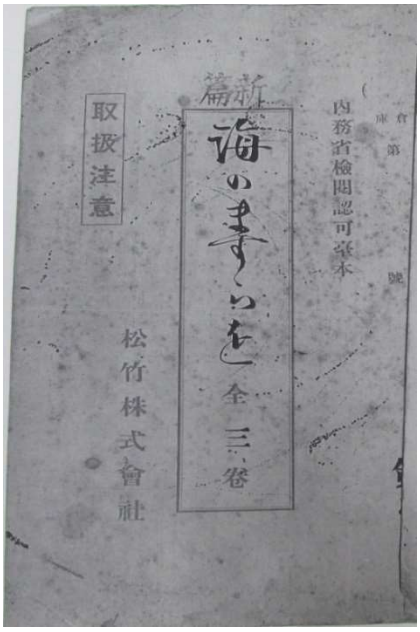
この「洋楽」BGM はオープニングシーン、体操シーン、端艇帆走シーンとラストの大成丸出帆作業シーンの三か所で流れてくる。「洋楽」の意味するところは三味線太鼓の邦楽でないことは明らかであるが、端艇帆走シーンの BGM は軽快なメロディで聴いたことがあるような曲であるが、この映画用に作曲・演奏されたものかどうかは筆者には解明できない。映画製作の音楽担当スタッフの「細田義勝」は、戦前・戦後に軍歌や歌謡曲の作曲をしているが、著名なヒット曲は無い。

挿入歌の「合唱」の一曲目は、最初の大成丸の映像の後に、ナレーションがあり、次に＜カッターの撓漕＞のシーンで「暁にひびく風と潮・・・・」の合唱が流れてくる。この曲は昭和 9 年に北原白秋作詞、山田耕筰作曲の『東京高等商船学校校歌　「暁にひゞく」』である。曲は３番まであるが一番のみが繰返し流れている。

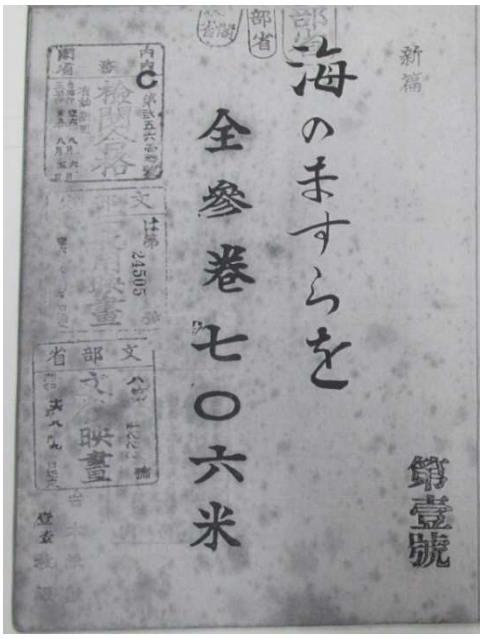
海洋会刊行の「檣濤歌集」では、校歌「暁にひびく」が、昭和７年 11 月に、今の大学一号館の落成式の際に披露されたと解説されているが、誤りである。

二曲目の挿入歌は、大成丸出帆のラストシーンの「洋楽」BGM の中に、赤枠内の歌詞の合唱が流れてくる。この「合唱」は、筆者は聴いたことが無く、「檣濤歌集」と「創立百周年記念寮歌集」や手元にある歌集には、この歌詞の歌は発見できない。寮歌に詳しいと思われる大先輩の荒川博氏（清 N6）、藤田善範氏（清 N5）、吉田藤人（清 N5）氏にお尋ねするも、どなたも知らない・記憶に無いと云われるのである

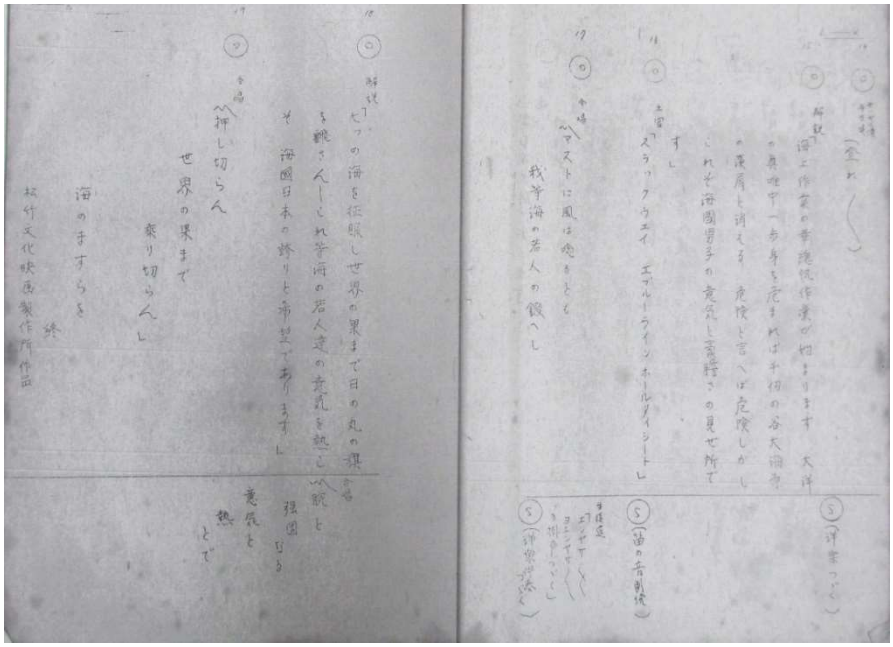
シナリオ表紙



シナリオ中表紙



シナリオ最終ページ



一曲目の挿入歌の歌詞

一、暁に響く風と潮
波を蹴って進む商船
いさぎよし我ら勢ふ
見よ海國男子
豪膽恒に則あり
とどろけ西と東
奮へ海運
見よ見よ既に昇る朝日
翻る國旗今ぞ
今ぞ我が商船
越中島奮へ

二曲目の挿入歌の歌詞

マストに風が唸るとも
われら海の若人の
鍛えし腕と強固なる
意気と熱とで押し切らん
世界の果てまで乗り切らん

「庄司メモで」は歌詞の最後は「乗り行かん」であるが、シナリオと映画では「乗り切らん」と異なっている。

此の映画が作られたのは、昭和 12 年に盧溝橋事件が起こり、日中戦争が拡大して行く過程の昭和 15 年であり、皇紀二千六百年で東京オリンピックも予定され、世相は国威発揚で軍事色が強まり、いわゆる軍歌「暁にいのる」（ああ　あの顔で　あの声で・・）が流行し、軍歌や映画が粗製乱造された時代であった。
「檣濤歌集」には、収録されていない埋もれた「寮歌」が多数あると記されており、また、多数の映画や軍歌が溢れた時代の、歌の題名を知ることは難しいと思われるが、読者でもし題名をご存知でしたら、ぜひお知らせ願いたい。
昭和 12 年 6 月にコロンビアから流行歌「海の若人」（久保田宵作詞、古関祐而作曲、松平晃唄）のレコードが発売されているが歌詞・旋律が異なる。

３．今後の調査予定

「庄司メモ」にある映画の「シナリオ」を、昨年 12 月 1 日に百周年記念館事務室で閲覧させて頂いたが、これは撮影スタッフ氏名とナレーションと挿入歌の歌詞が記された「内務省検閲認可臺本」であり、BGM の曲名や挿入歌の題名は知ることが出来ない、不鮮明な複写物であった。
おそらく、百周年記念資料館には映画の企画書的な資料が存在すると思われるので、コロナ禍が収まり明治丸ボランティアガイド活動が再開してから確認する計画である。また、「松竹映画会社」にも問い合わせをすることも考えている。

［参考資料］

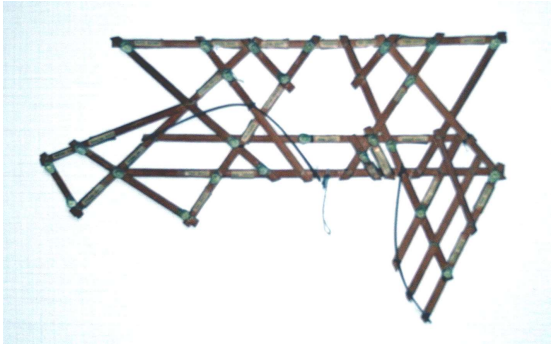
軍歌と日本人＜国民を鼓舞した 197 曲＞　大野敏明著　産経新聞社　2019.5.12
日本の軍歌＜国民的音楽の歴史＞　辻田真佐憲著　幻冬舎新書　2014.7.30
商船学校校友会会誌、海洋、（昭和元年～昭和 15 年）
松濤歌集　海洋会刊行　H26.1.15

§南の島人は凄かった§

正会員　都築雅彦

物置部屋一杯の溜め込み物を見て、そろそろやるかで整理、分別していたところ、写真の物を見つけ、入手のいきさつもあって南の島人の凄さを考えてみた。

一見、棒を組み合わせただけであるが、これはミクロネシアのマーシャル群島で使われていたスティックチャート（バンブーチャート）と言う海図のレプリカで、4（昔）ほど前、会社がミクロネシア航路（サイパン・グアム・トラック(Weno 島)・ポナペ(Ponpei 島)・マジュロ(Ajeitake 島)）に定期航路を開設することとなり、各島々の海運状況調査に出張した折、マジュロで代理店の支配人が、小生が船乗りであることを知って「次はこれを使って来い」と笑いながらプレゼントしてくれたもの。



これは、島の航海師がカヌーで周辺の島々に渡った時、次のために、風、波、うねり、距離などを細い棒を網状に結び合わせ、島の位置は子安貝を縛って表したもので、棒の向き、曲げ方、間隔などの意味は本人しか解らず、使い方は師弟の間で伝授するとのこと。　大きな島には近くの島に出かける時の案内人となる航海師がいて、それぞれの流派があって、各自の流儀で海を渡っていたとのことで、目的の島にカヌーでこの海図をもって向かうのだから凄い。

マジュロがあるマーシャル群島は、ほとんどが環礁（ビキニ、エニウェトク、・・・）で、高い場所でも標高数メートルほどの低い島ばかりで、ヤシの木が生えているとはいえ遠くから視認できるものではなく、正確に目的の島に進まなければ外れてしまう。

ポナペでは、少年が広いラグーンの内で、カヌーに小さなクラブクロウ式の帆を掛けて走り回り、手作りのモリで夕食用の魚を取っているのを見て、川や池で網で魚を掬うのと違って、小さなころから海に出ることが遊びで、子供ながら凄いことをやっているなと思った。

この海域は、第１次大戦後日本（大日本帝国）が信託統治として治めていた地域で、当時は「内南洋」と呼んでおり南洋庁も置かれていた。そのせいか日本人との混血もあ

り、ミクロネシア連邦の首都ポナペの大統領は「～NAKAYAMA」さんだった。
　その後の太平洋戦争で日米の戦場となり、世界最大級の環礁のトラック島には連合艦隊基地が置かれ、本土から軍需物資を届ける輸送船団が列をなして向かっていったところで、環礁内には米軍機にやられた何十隻もの船や艦が眠っている。
山本五十六長官が最後に飛び立ったのもここ。
多くの島々には、戦時中の高射砲や零戦の残骸が残されており、海には軍艦や輸送船が沈んでおり、島に渡るとき、コンチネンタルエアーマイクロ社の定期空路を利用したところ、途中の環礁に沈んでいる日本船を、上空で機体を大きくバンクさせて見せてくれるサービスがあり、当時すでに沈船ダイビングツアーもあった。
　これ以前に会社の仕事で「戦時船史」の編纂に携わった経験から、輸送船の悲惨な結末が観光資源化していることには大きな違和感を感じたもの。　ミクロネシア航路を開設して１年ほどたったころ、ある島で不時着した零戦が見つかり、元隊の熊本に運び遺品となったことがあり、少しは供養ができたかと思った。
　ポナペには、「ナンマドール」と呼ぶ城郭のような遺跡があり、かつての文明レベルを知れる。この遺跡は島内の柱状節理の玄武岩を切出し、平坦なサンゴ礁の島に敷きならべて基礎を造り、この上に石柱を組み合わせながら積み上げて石垣のようして城郭を造っている。　（海洋大資料館の入口階段横に大成丸がクサイエ島から持ち帰った玄武岩があるが、ナンマドールの石柱と比べると小石的サイズ）
現地では、「巨人が石切り場から島に投げて積み上げた」と語られているが、カヌーで運ぶには重すぎるので、どのようにして運んだのかは不明。　ミクロネシア西方のカロリン諸島ヤップ島には、有名な石の貨幣があるが原料の産地は遠く離れた島で、これもどうやって運んできたかは不明である。　イースター島の人たちも巨大なモアイ像を海岸まで運んで並べて立てているので、重い物を動かす特殊能力があるのかもしれない。

　ミクロネシアの南方のメラネシア、その東のポリネシアの人々も海洋民族として知られており、最近では、「ホクレア号」がハワイからタヒチまでを、かつてのポリネシア航海術で踏破したことが知られているが、この時の航海師は天体コンパスで船を進めたとされている。「ホクレア号」はその後日本にも来ており、彼らには太平洋は我が家の庭ではなかろうか。
　オーストラリアのアボリジニ人たちは、昼は太陽、夜は天の川の見え方で、方向と時刻を知って広い砂漠でも迷わないとのこと。家から 1000km も離れた学校の寄宿舎に入れられたアボリジニ少女が、親に会いたくなって砂漠を徒歩で帰った能力も凄い。
（見守り GPS をランドセルに付けて学校に行くなどナニソレである）
アラブ人たちは古くから真鍮製の星座盤様のアストロラーベを作って、砂漠や平原を旅していたが、こちらは天体の観測による結果を実用化したもので、真鍮版に天球図を彫り込む技術も必要となるので、大平洋の人たちのとはちょっと違う。

・・・で、このような能力を持った人たちが、どのような事情で絶海の孤島的な島々に集団で移住したか？が気になり、以来色々調べているが「なるほど」の答えは見つかっていない。

人類がアフリカを出て東南アジアからニューギニア方面に移住してきたのは4万年ほど前で、オーストラロイド人とされており、オーストラリア方面まで進出。　この時期は最終氷期で海面の位置が低く、アジア大陸からオーストラリアまでの土地は、海の向こうに陸地が見える距離で、「行ってみようぜ」で海をわたって移住したようである。

4,000年ほど前には、大陸から台湾に渡り、南の島々に移っていったオーストロネシア人と呼ばれる人たちが、メラネシア・ミクロネシア・ポリネシアの島々に移住した。その人たちに混じって土器文明を持つラピタ人がニューギニア辺りからメラネシアの島々に移住したことが遺跡調査で分かっている。　某研究者によれば、海に乗り出したのは、ラピタ人がマラリアなどの感染症から逃れるために、蚊のいない海に乗り出した、との説があるが、太平洋の島々に出て行くには島々の距離があり過ぎで、先の島が見えない海上をひたすら東向きに航海する動機は何だったかが気になるところ。
島が見えなくても舟出するのだから凄い。
（最遠のニュージーランドやイースター島に移住するのは1,000年ほど前）

東海大学海洋考古学の小野林太郎教授の研究によれば、メラネシアの島々に居住した古代人たちの住居跡からは、マグロやサバの骨が多く出土しており、目の前のサンゴ礁の魚より沖の大きな回遊魚を主食にしていたと考えられ、生活の場が海上で、カヌーの下を泳いでいるサバやマグロを獲って食料にしていれば、「狩りや農耕などはやってられない」だったかもしれない。

丸太をくりぬいたカヌーにアウトリガーを取り付け、乗れる人数を増やしパンノキやヤシの実を積んで、マグロを獲ればいいやで進んだのかもしれない。　カヌーにクラブクロウ式の帆を掛け、貿易風を受けて、波また波の太平洋を東に向かって走っていったのだから驚きである。　この型のセールは、風に対し最も切り上がる性能があるので、風上に島が見えたらクローズホールドのジグザグコースで行ってみようだったのではないか。

南太平洋の大きな島はほとんどが火山島で、島には高い山があって遠方からも見つかる可能性は大きく、ポナペのナナラウト山は標高800メートルあり60海里ほど沖から視認できる。　ちなみに、西サモア･サバイ島シリシリ山1858mの視認距離は89海里、タヒチ島オロヘナ山2247mは98海里、ハワイ島マウナケア山4206mは134海里で、これらの島を発見する範囲はかなり広いようである。（地文航法の教科書で算式を確認）

とはいえ、乗り出す前に行く先に島があることは当時は分からなっかたのだ。

この謎解きはボケ防止の点もあり、これからも続けいるつもりでいる。

§肥田浜五郎の横須賀造船所完成への尽力§

正会員　澤間譲治

前号では肥田浜五郎が石川島造船所を本格的な造船所にすべく様々な機械を買い入れる為にオランダに出向いていたが、その間、幕府は造船所を石川島ではなく横須賀に造る事を決定し、その決定には、フランスのロッシュと小栗上野介が大きな影響力を発揮した顛末を詳述した。本号では、寝耳に水のこの知らせを受け、唇を噛む思いでこの決定に従った肥田浜五郎のその後の活躍を詳述する。

慶応元年四月二十五日、幕府は横須賀造船所建設準備の為、外国奉行柴田日向守を理事官として、フランスに派遣した。
柴田日向守は四人の書記官と一人の従者を連れて日本を発った。従者の岡田摂蔵はこのときの外国行を「航西小記」という書にまとめている。それによると、柴田らは慶応元年（１８６５）五月五日に横浜を出航、七月十七日パリに着いて製鉄所の創設に参考となる施設などを見学して歩いた。とくにフランス各地の造船所や海港や要塞、砲台などを視察し、いったん英国に渡り、十一月十三日、ロンドンを辞して再びパリに帰った。（日本への帰国は十二月三日に出発）
この「航西小記」はわずかの見聞を書きしるしたにすぎず、肥田浜五郎についてはつぎのように書いてあるだけである。
「七月十五日リヨンへ到着、旅館には肥田君オランダより出張にて、使節柴田君に面会あり」
さてフランス公使やウェルニーとの協議にもとづいて、柴田理事官はフランス政府に技師、工手の雇入れや、機械類の買収などの交渉を進めた。しかしフランス政府は、機械類等をすべて自国から買わせると、イギリスの嫉妬を買うおそれがあるとみて、柴田理事官をイギリスにも渡らせて同地の機械類も買わせるという気のくばりようであった。
柴田理事官は細心且つ勤勉で随行者によく気をつかう親切な人であったらしいが、小心者で、外国奉行の肩書に似合わず、政治家と称するほどの器量の人ではなかった、と随行した福地源一郎が「懐往事談」の中で書いている。しかも柴田理事官は頑固者で草履の代わりに靴をはくのは許したが、式服や冠物は純然たる日本風を守り、けっして外国風をまねることを許さなかったらしい。他の留学生などはみな西洋風の服装をしていたのに、彼らだけは陣笠をかぶり小袴羽織を着て、腰に大小をはさみ、パリの市街を通行したので、恥ずかしいばかりでなく、町の人からも「オー、ジャポネー」「アー、 シノア（フランス語で中国人を比喩的に表現する時に使われた）」 と呼ばれ、犬にも吠えられたと書かれている。皆はたびたび柴田に嘆願したけれども、頑として許さなかった。そんな状態のところへ、オランダから肥田浜五郎が柴田の一

行に加わったが、柴田はすぐさま肥田にも洋服をぬがせて、日本風にもどさせたらしい。
監督として雇い入れたウェルニーは、年は若いが思慮深く、勇断に富み、海軍大臣の紹介から、諸造船所長、工場長などとの応接をみな一身に引き受け、いろいろと柴田理事官と相談して自分勝手なまねはせず、協力して目的を達することができたと、福地源一郎は書いている。
しかし日本の代表団には造船にくわしい専門家はいなかった模様で、肥田浜五郎を除いては機械等の専門家はいない。このため肥田は日本側の専門代表委員のような形にならざるをえず、ウェルニーとは様々な局面で意見が合わずに、必ずしもうまくいっていたわけではなかったようである。
　慶応元年（一八六ん）七月、肥田浜五郎オランダからフランスに渡り、柴田理事官一行に合流した。十月パリで肥田はウェルニーに、オランダ、イギリスで購入した工作機械の内訳を記録し、その目録を渡そうとした。ウェルニーはその目録を見て、
「甲鉄艦製造機械（ハクセルフラーツ）以外はすべて製鉄所の使用に適当なものと認めます。なお現品は精密検査をしてから、機械を受け取りましょう」といったところ、肥田浜五郎は、
「機械のほとんどはオランダですでに輸送船に積み、日本へ送るばかりになっています。いま一度検査するとなると、陸揚げして荷をほどき、検査のうえ梱包しなおして船植みしなければなりません。しかも、あなたをはじめ、フランスの検査員がオランダまで出向かねばならず、輸送船もその間滞留することになるし、あれやこれやで手数がかかり、その費用は莫大で、機械原価の半額を超えるでしょう。いっそのこと機械の製造にたずさわったオランダの技師デ・ウィットとロッテルダム、クレジット商会の幹事らに機械の良好なことを保証させたうえで、受け取ったらいかがですか」と提案した。
するとウェルニーは、
「それは駄目です。もし現品の検査をせずに受け取り、横須賀へ到着してから欠陥を発見したような場合には、日本政府に対して製鉄所首長である私の責任になります」と主張して、頑として聞き入れず、検査を主張した。
なにしろウェルニーは幕府とフランス両国政府の任命した最高責任者で、首長と呼ばれており、技術関係のことについていちばん強い権限を持っていた。肥田もウェルニーに食い下がったが、権力からいってウェルニーにはかなわない。そこで柴田理事官は温厚な人だけに、両者に割って入って、
「すでに輸送船に積んだ機械はそのまま日本へ輸送し、ほかの工場で使用することにします。まだ船積みしてない機械九百七十四個はウェルニー首長の検査を受けて、パスしたものを製鉄所で使用することにしましょう」
と仲介の労をとって、ようやくウェルニーも承知した。

その後肥田浜五郎はその手続きをすませて、十二日、機械類の受領を完成した。このときウェルニーに渡った機械の総数は九百七十四個、代価十八万七千五百二十三フラン余りであったと言われている。
なお肥田は造船所の設置の場所についてもウェルニーと意見を異にした（記述済）。
「造船所は江戸湾の最も深いところ、石川島か越中島に設けた方がよい。横須賀は形勝の地ではあるが、外国船の自由な碇泊を許している横浜港の外にあるので、いざ開戦ということになれば、不使もはなはだしい」
という肥田に対し、ウェルニーは、
「江戸湾内の横須賀こそ天然の形勝地である。かりに石川島か越中島に設けるとしたら、いったいどんな工事を施して造船所建設の適地に仕上げようとするのか。たとえそれが可能にしても莫大な費用がかかる。それを考えずに石川島や越中島の方を望むのは空論に近いものだ」というのであった。
むろん肥田浜五郎としては十分な論拠を持っていたが、とにかく肥田とウェルニーとはその出会いからウマが合わなかったらしい。こうして造船所設置問題には柴田理事官もほとほと弱って、自分では決定できず、両人の意見を書いて幕府に上申したが、幕府の首脳部は、はじめから横須賀にきめているのだから、肥田浜五郎には初めから勝ち目がなかった。しかし、肥田は石川島説の正当性を捨てた訳ではなく、帰国後に長文の意見具申書を慶応二年八月に幕府に提出している。当該意見具申書の内容はOcean１９号１９頁から２１頁に掲載済みなので、此処では省略する。
細新後はともかくとして、当時の肥田浜五郎の主張には一理も二理もあって、その為この意見具申書の内容に賛成した者も多く、建議が実現出来なかった事を遺憾とした者も少なくなかったと言われている。しかし、既に両国政府の首脳部ですでに取りきめたことなので、肥田浜五郎の力ではどうすることもできなかった。あるいは肥田はそのことを十分承知のうえで、あえて反対意見もあることを示すために書付を提出したのかもしれない。

慶応元年(一八六五)十二月三日、柴田理事官らは任務を完了したので、属僚および肥田軍艦頭取の一行、それに建築課長レノオ、頭目ジュモン、職工エバスチャンらとともに、パリを出発し、マルセイユ港から乗船し、帰国の途に着いた。購入した機械類もその船に載せたが、これは建築業務が日本に着いてから先ず第一に着手しなければならぬ仕事であったからである。ウェルニー首長はあとに残り、別の機械を注文したり、雇用者の選択その他の仕事を終えて、横浜に着いたのは翌年の四月二十五日であった。

以上の経過を辿り、肥田浜五郎は慶応二年（一八六六）正月二十六日にオランダから帰国し、再び千代田形軍艦の建造に取り掛かり、蒸気機関を完成させると言う偉業を

成し遂げた訳だが、このころ幕府の威信は既に崩れ掛かっており、第二次長州征伐が始まろうとしていた。

此処で若干脇道に逸れるが、肥田浜五郎はこの長州征伐に幕臣として参戦しているが、その様子を土屋重朗著『近代造船事始』に書かれた該当部分から、ほぼそのまま引用させて戴く。

征長軍は山陽と芸州口と山陰の石州口と関門海峡をへだてた小倉の三方面から、いっせいに攻撃に出る構えをととのえた。海軍からは、幕府艦隊富士山、翔鶴丸、八重、朝日の四艦が救援に加わった。肥田はこのとき最新鋭艦富士山の艦長を命ぜられて参戦している。富士山艦は前年にアメリカから買い入れたばかりの新鋭艦である。長州側は幕府の小倉口に対しては、高杉晋作を最高指揮官として奇兵、報国、正名国、八幡、整武などの諸隊を布陣し、それに遊撃の海軍丙寅、発亥、庚申、丙辰の四艦が海峡に待機、万全の迎撃態勢を敷いていた。
戦闘はまず慶応二年六月八日、幕府は歩兵と松山藩兵の大島攻撃によって開始され、つづいて随所で攻撃の火ぶたが切られた。大島はいまの屋代島で対岸には大畠、柳井などがあり、瀬戸内海の交通の要路で周防ののど口にあたる。幕府の軍艦が ここを砲撃したのは六月七日で、この日はあくまで偵察のための射撃だけだった。本格的な砲撃が行なわれたのは翌八日からであった。この日百五十名ばかりの兵士が上陸したが、それは島内の一部を偵察しただけで、まもなく軍艦に引き揚げた。
さらに幕府の艦隊は六月十一日夜、 大島（屋代島）の久賀と安下庄に猛攻をあびせて、その援護のもとに陸軍部隊を大島に上陸させた。上陸部隊は幕府歩兵奉行河野伊予守、同戸田肥後守配下の歩兵四大隊に御持小筒組の諸隊、さらに松平式部大輔のひきいる二千余の松山藩兵であった。これに対して守備の長州兵はその十分の一にも足らず、幕府側の圧倒的多数の軍隊を相手に苦戦をしいられた。大島の戦況はただちに防長州軍によって山口の政事堂に報告され、応援部隊として、長州から諸部隊と第二奇兵隊が派遣されたが、頽勢を挽回することはできなかった。
大島を幕軍に占領されることは防長二州にとって致命的であった。ところが丙寅丸による高杉の軍艦奇襲作戦が見事に成功して、大島は再び長州軍の手にとりもどされた。
陸における長州軍と幕府軍の戦闘はいたるところで行なわれたが、だいたい戦意がちがううえに、長州軍は新鋭隊による洋式の戦闘方式によってさんざんに幕府側をなやませた。しかも地元だけに地形を熟知している。士民一体観が強調され、しばしば奇襲戦法を用いたので幕軍の退勢はおおうべくもなかった。
開戦二旬もたたないのに、幕府側は全線にわたって敗退し、収拾できないほどの惨敗を喫した。そのうえ慶応二年七月二十日、将軍家茂の急死が征長軍の足並みを乱し

た。戦いは長州軍の大勝利に終わった。八月、征長停止の勅令が下り肥田らの幕府軍艦も帰府した。帰国後まもない肥田にとっては負け戦にかり出されて、とんだ災難だったと言えるのかも知れない。

第二次長州征伐の幕府方の敗北後、幕府の凋落振りは目を覆うばかりのもので、慶応三年十月十四日に薩長に倒幕の密勅が下り、将軍慶喜は土佐藩主の山之内容堂らの進言を入れ、同日大政奉還を建白、十二月十九日には王政復古が宣言されると言う急展開で幕府はあっさりと瓦解した。
しかしその後も世情は混乱を極め、徳川家中でも主戦派あり、恭順派ありで、江戸城開城後も彰義隊の乱、東北諸藩の反抗等々戊辰戦争と言われた日本最大の内戦が続いた事は周知の通りである。

ここで、長州征伐敗北後から幕府瓦解までの幕府海軍の様子に触れておき、その間の肥田浜五郎の様子を述べておきたい。
肥田はこうした幕府瓦解のおり、どうしていただろうか。
第二次長州征伐の後、幕府は海軍の操練を英国式に改め、英国海軍に伝習を一任した。その条件の一つとして、日本人のオランダ伝習以来の教授方はすべて教官として採用せず、英国試官による独自の教育をほどこすことにした。しかしこれでは実際の訓練には差し支えるので、教授は行なわないが日本人によって伝習不備の点を補うため「伝習掛員」 は採用した。 はじめ神奈川で行なう予定であったが、慶応三年十月、築地のもとの軍艦操練所（伝習所、旧海軍所）へ一時生徒も教官も寄宿舎ごと移ることにした。十月十六日イギリス教師士官二人、下士官二人、水卒四人が横浜に到着、漸次揃って英国人は総計十二人。教頭トレーシー准艦長コマンドル、砲術士官ア・カ・ウィルソン、測量方士官ジ・セ・グランド、蒸気方士官ヂ・ロブソンなどであった。
伝習所地内に教場と生徒室なども増築し、おもに年少子弟を募集した。日本の側役人の中の一人として肥田浜五郎は会計方に採用された。もちろん教育はできず一事務員にすぎない肥田としては、面白くなかったにちがいない。
伝習授業は慶応四年正月五日からはじまったが、伝習生の学業がはじまらぬうちに、大政奉還の後、国内に騒乱が起こり、二月十二日外国人はいずれも教授はできないので、ひとまず横浜へ引き揚げさせるべきだと、英国公使パークスから幕府方へ強い申し入れがあった。「思うにこれは公法にてらして局外中立の処置に出たのだろう」と、勝海舟は述べている。こうして英人教師は築地を去って横浜居留地に行き、生徒は一同退寮し、職員は解散して海軍伝習所のことはこれで廃止になった。
肥田浜五郎は海軍伝習が廃止になったので、特に為すべきことも無くなったので、時局を静観しようとしたのであろう、伊豆に帰って、元の主家である、韮山の江川家を

訪ねた。この時父の肥田春安は八十二歳、肥田浜五郎は三十九歳であったと言われている。

　幕府瓦解後、早速薩長土肥が中心になって、明治新政府がスタートした訳だが、明治新政府は人材に乏しく、有能の士なら旧幕臣であろうと、特殊な曰くつきの反薩長人士や新政府に遺恨を持たないかぎり、過去を問わず新しく採用して、それぞれ学界、業界、あるいは政界、軍部等で採用して、運用をはからざるをえなかった。とくに蘭学や英仏などの洋学を学んだ者は旧幕臣に多く、特殊の技能に秀でた者も同様で、新政府の発展のためにはとうしてもこういう人たちが必要であった。これはと思う人にはさかんに新政府への出仕をすすめた。旧幕府の封地である静岡藩には当然ながら人材が集まったので、政府はこの中の目ぼしい人にはほとんど出仕をすすめている。西周、中村直、赤松則長、勝海舟、山田鉄太郎、林研海、戸塚文海など、いちいち名前をあげたら、きりがないほどであった。
当然、肥田浜五郎も旧幕府海軍の機関関係の第一人者であるから、声がかからぬはずはない。とくに造船関係には人が少なく、船も少なく、箱館戦争で榎本以下有能な人々は戦死したり、捕らわれている。

明治二年（一八六九）八月十五日、肥田浜五郎は民部省に出仕をすすめられ、准十等という等級で迎えられ、すぐさま川蒸気機械取調御調掛を申し付けられた。肥田浜五郎四十歳のときであった。
「横須賀海軍船廠史」をみると、「明治二年八月二十三日民部省出仕肥田浜五郎、製鉄所に来りて当時組立中なる泥凌船の機械を点検せり」と出てくる。泥凌船の機械は浜五郎が幕末オランダから買って来たもので、この泥凌船で、石川島造船所の泥凌いをする予定であった。それを実現するため横須賀製鉄所で泥凌船の機械の組立点検をしたのである。
就任後、最初に、肥田は横須賀製鉄所へ職掌がら出張したわけだが、ここは予想どおり新政府に引き継がれて、フランス人ウェリニーが首長を勤め、すべての管理指導と運営を行っていた。当時はまだ造船所は完成せず、製鉄所と呼んでいた。副首長はチボジー。首長の年俸は一万ドル、副首長は六千百ドル、医官は五千ドルで、日本人の給料とは比べ物にならなかった。なおウェルニ—の力は絶大で、所内では全てが彼の言う通りであった。明治ウェルニー十二日、ウェルニ—は自分以下フランス人二十四人の再雇用を認めさせた上、新たに八人のフランス人を採用した。ただし従来雇いフランス人は四十五人で、年棒の合計は八万三千七百六十ドルであったが、今度は三十二人で一万六千四百六十ドルを節減して合計六万七千三百ドルとした。その代わり一人当りの俸給は増額になっている。

ウェルニーは三月十八日、フランスに帰省の申請をして、往復旅行に要する日数を四か月、フランス滞在を六か月、計十ヶ月の休暇を申請し、その間は副首長チボジーが代理を勤め、ウェルニーの帰着は新しく雇用する八名の選定と、製鉄所の会計整理という公務を兼ねるという理山から、フランス滞在中も俸給の額を支給するよう要求するという、ちゃっかりしたものだったが明治政府は文句を言う事もなくその額を支払っている。全くフランスの言いなりであった。

日本側は明治元年四月、製鉄所を神奈川県裁判所の管轄とし、主任官判事寺島宗則、井関盛長にその任にあたらせたが、これは名だけで、直接の責任者はおらず、訳官中島才吉が裁判所側との連絡にあたっていた。これですべてがフランスの言うがままでまことに不便なので、同年十一月十八日、山口藩士山尾庸三に製鉄所の事務を総括させることとし、同月二十五日、大蔵省は製鉄所の管轄を神奈川県から受け継ぎ、日本人職員にもやっときまった官名を与えるようになった。そのおもなものをあげると、民部省監督大祐　兵動忠平（旧神奈川県巡察補）、大蔵省出納権大祐　志村左一郎（同県庶務）、民部省土木権少祐　山口成一朗（同県庶務補）、出納少祐　大島八十太郎（旧同県頭試輔）
今では理解に苦しむが、二つの省が同じひとつの事業を統括運営したことになる。

このころの浜五郎は、軍艦武蔵の修復御用掛を申し付けられて、石川島造船所でその修復にあたっていた。部下には伊豆から出て来た船大工が多かった。石川島は浚泥を行って水深を深くし、二、三の機械を増設した程度で、ほとんど艦船の修復を行う程度に止め、浜五郎の希望に反して軍艦は造らなかった。
明けて明治三年二月十二日ウェルニ—首長がフランスから帰って来た。製鉄所はこれこれを管轄府ウェルニー、井関権大丞心得はウェルニ—にねぎらいの書を送ったとのこと。

ところで製鉄所の主要部門はすべてフランス人の手によって占められていたので、もし彼らが一度に帰国するようなことがあったら、その機能はすべて停止するばかりでなく、現状ではいつまでたっても主導権をフランス人に握られ、日本の自主性が認められない。これを打開するには日本で製鉄、造船の学校を早急に建て、生徒を養成する必要がある。これは神奈川県時代から考えていたことで、その後徐々に準備をすすめていた。今度ウェルニーが帰って来たので、その点について兵動監督大祐は彼の意向を質してみた。ウェルニーも技術生徒を養成することは賛成であったので、兵動はこのことを民部省出仕の肥田浜五郎に伝えた。「製鉄所仮学校は一応設置できたので、すぐに生徒を募集して開校したい。寄宿舎はまだできないけれど、一時民家の広

い家を何軒か借りれば間に合うと思います。このことをあなたから民部大輔、少輔に伝えて、至急生徒を募集していただきたい」と兵動は肥田に依頼した。
肥田はさっそく民部省にはかり、三月二十九日には横須賀に民家を借り、「黌舎規則大要」九か条を作って生徒を募集した。当時まだ正式な学校の名称はなく黌舎と呼んでいたが生徒に製鉄造船の技術を教えるところとした。これが明治三十年には海軍造船工練習所となる。
明治三、四年ごろの学校としては学則も整然とし、学業内容も確立され、かなり程度の高い学校だったことが想像される。

明治三年（一八七〇）四月十八日、伊藤民部少輔よび井関権大丞心得は横須賀製鉄所を巡視し、同時に山尾庸三民部兼大藏権大丞に製鉄事務総括を任じ、製鉄所の事務をまかせた。まもなく七月十三日になって太政官は製鉄所事務総括民部兼大蔵権大丞山尾庸三の兼官を解いて、さらに製鉄所を民部省だけの統括とした。つまり、いままでは民部省と大蔵省の役人を同時に一人で兼職し、事業所も両省で管理していたが、どちらも民部省だけの扱いとしたわけで、維新時の職制はまことに変化がはげしかった事が解る。
一方、肥田は明治三年七月二十二日、土木正に任ぜられ、同日正七位に叙せられた。この年十月二十三日太政官に新たに工部省を設け、勧工、鉱山、製鉄、灯台、鉄道、電信の事業を管掌させることとし、以後製鉄所は工部省の所管となった。十一月には工部少丞に任ぜられ、山尾工部権大丞とともに製鉄所の事務を総理する事となった。しかし山尾は東京に在住してときどき横須賀に来たので、肥田の仕事は忙しかった。肥田の仕事もこれから横須賀において本格的な活動がはじまる。

先ずは十二月、東京にいる山尾に「製鉄所の生徒の中には資性の劣る者、あるいは身体が弱くて将来事業のおぼつかないものが数名いるので、ウェルニ―らの申し出によって、やむを得ず退学させたけれども、この者たちはみな若年の子弟で、いますぐ成業の見込みがないと断言する事は出来ません。多少フランス語や算術を学習したので、あなたのお力で大学南校に入学させるよう御尽力をお願い致します」と申しいれている。大学南校は後の東京大学に合併昇格するが、ここへ転学させようというところをみると、横須賀の学校もかなり程度が高かったようで、同時に肥田浜五郎と言う人物の思いやりが伺えるエピソードではある。

明治四年一月下旬、ようやくドックが完成してその開業式を行なう予定であった。肥田は東京にいる井上権大丞に手紙を出して、「本月下旬ドックの開業式を挙行のさい、ドックに試験のため入れる船には竜驤艦を使用し、また修船台には別に一艦を用意して、その進水法を来賓に供覧させたいと思います。そのため兵部省に相談して、

いま船底の検査を要する四百トン内外の艦船を横須賀に回航させていただきたい」と申し入れた。ドックの開業式は多少おくれて二月七日の予定となり、臨場予定の来賓は兵部卿有栖川熾仁親王、大蔵卿伊達宗城、参議大隈重信、同佐々木高行その他錚々たる面々であった。ところが当日は折悪しく暴風雨のため式を挙行できず、翌八日に日延べした。入渠試験のはずだった竜驤艦は貴賓の送迎に使われ、代わって春田艦を用い、修船台からは飛竜艦を進水させて来賓の観覧に供した。このドックは慶応二年(一八六六)三月起工、四年十一ヵ月の歳月を費やして完成したもので、横須賀のドック第一号であった。
四年四月七日、政府は横須賀製鉄所を横須賀造船所、長崎製鉄所を長崎造船所、横浜製鉄所を情浜製作所とそれぞれ改名し、長崎製鉄所は従来長崎県の所管であったのを工部省の所管とした。

肥田少丞はこれより先、大隈参議に工部省に属する諸科、すなわち鉱山、製鉄、造船、建築、製作などに従事する者の「工部省質問生および伝習生外国留学規則」を提出しておいた。質問生とは欧米留学中の学生名義の官吏のことをいう。この規則が五月二日に採択され、選抜のうえ優秀な者は工部省からも外国留学生を出すことができるようになった。

なお明治四年頃はようやく文明開化の花が咲き始める頃で、特に近代的な機械文明を真っ先に受け入れた工部省では次の様な布達を出している。『工部省は工場その他出張所等に就業する官使は儀式執行の際を除くの外は便宜洋服を用い、もしくは脱刀するも随意である』六月十七日には造船所は港則を定めて、工部省に届け、同時に外務省にも通報した。

明治四年八月、肥田心造船兼製作頭に任ぜられ、引きつづき横須賀に在勤した。このときの辞令は「工部少丞肥田為良」となっている。このころから数年間肥田は浜五郎を廃して、為良と名のっている。為良は別に新しくつけた名前ではなく、幼時、父の春安が命名したものであるが、通称浜五郎で通してきた。肥田家は祖父春達は為秋、父春安は為成、兄謙吉は為真、敬二郎は為副、菊三郎は為信とそれぞれ全てに「為」の字のつく別の名前をもっている。
さて肥田浜五郎は最初の造船頭および製作頭である。これは横須賀在勤であるから、工部省の局長というよりむしろ、横須賀造船所長兼横浜製作所長と同義だろう。つまり日本人としては造船の一番の長で責任書である。しかし横須賀造船所の実際の仕事や運営面ではフランス人による首長がいて、当時はこの首長の力が頭よりもむしろ権限を持っていた。

ところでウェルニー首長と肥田浜五郎は過去にもいろいろのいきさつがあり、現実にうまく行っていたのか懸念がのこるが、ウェルニーという人は誠実で、 いばり散らすという型の人でなく、技術者らしい、はったりのない人で、性格も穏やかであったようだから、少なくとも表面的あるいは平常の運営面では、だいたいスムーズにいっていたのだろうとは思われる。しかし諸規則や権限、重要な運営上、技術上の問題については、つねに日本側の方で譲歩を余儀無くされていたらしい。
このころ、四年十月五日ウェルニーは副首長のチボヂーと大学南校雇教師 フルベッキ、同東校雇教師ホフマン、灯台寮雇ブラントンおよび鉄道寮雇カリゲルらと計六人で、皇居内の山里離宮で明治天皇に謁見を許されている。
またウェルニーは十日、肥田造船頭に造船所創業以来の状況のあらましを書面をもって報告している。これは新しく造船頭という職ができたため、その頭（長)に報告ということだろう。それによると、『造鉛所は一八六六年(慶応二)三月、着工し、今迄既に数ヵ所の工場を設置して、修船事業に努めた。これらの工場に据え付けた機械の総数は百十六個で、これを運転させる蒸気力は百八十馬力、溶鉱、その他鋳錬用の炉窯は五十ヵ所あり、本造船所で造った汽船、浚泥船および起重機など合わせて十隻でその総トン数は七百四十トン、蒸気力は総計七十六馬力である。また造船所創立以来明治四年(一八七一)六月までの経費全額は百五十八万七百九ドルで、 いま着手しているものは第二号ドック築造と倉庫の建設である』と。
この報告と前後して、肥田造船頭は十月二十二日太政官から理事官として、岩倉全権大使一行に加わって欧米各国に派遣される命令を受けとった。そして肥田の代わりに工部少丞平岡通義が造船権頭に任ぜられ、その事務を代行した。

本号では石川島造船所を構想していた肥田が、幕府の計画変更により、急遽横須賀造船所建設に向かって汗を流した顛末を述べてきたが、ひと息ついたところで彼はOcean１４号で紹介した『咸臨丸での米国行き』に続いて再び今度は岩倉全権使節団一行と欧米訪問に出発する事になる。使節団での肥田浜五郎の様子と帰国後の横須賀造船所の総仕上げに活躍する肥田浜五郎の様子は次号に譲ることにしたい。

注：いままで述べたところで、大輔とか少丞とか聞きなれない官職がたくさん出てきたが、ここで簡単に明治維新の中央官職制について説明します。明治新政府は二年七月官制を改正して、神祇官と大政官の二官と民部省、大蔵省、兵部省、外務省、宮内省、刑部省の六省制をとり、太政官には左右大臣、大納言、参議などを補佐役としておいた。また六つの各省には卿、大輔、少輔、大丞、少丞、大佑、少佑の職制があった。卿は今の大臣、大輔は次官に相当する。各職の間に権少丞というように権をおいて、大少等の中間の位階職制とすることもある。二官六省制は民部省と大蔵省が分離し、工部省が新設され、刑部省が司法省と改正されるなど多少の変更はあったが、廃藩置県までこの状態がつづいた。

特定非営利活動法人　日本海洋塾
＜NPO　Meijimaru　Memorial　Academy＞
事務所：〒135－8533東京都江東区越中島2－1－6
東京海洋大学越中島会館2F
TEL：03-6458-5272
FAX：03-6458-5272
E-Mail：kaiyojuku5122@train.ocn.ne.jp
ホームページURL：http://kaiyou-juku.org